様式4

論 文 の 要 約

報告番号	甲 ㊤乙 第 1750 号	氏名	木下 貴正
学位論文題目	Time course of Changes in Metamorphopsia, Visual Acuity, and OCT Parameters after Successful Epiretinal Membrane Surgery		

論文の要約

目的：網膜上膜に対する硝子体手術後の変視量、視力、光干渉断層計所見の経時変化を明らかにすること。

緒言：特発性網膜上膜は日常眼科診療において最も頻繁に遭遇する後眼部疾患の一つであり、視力低下や変視症を来す。これに対して硝子体手術が有用であると報告されている。しかしながら、変視量の経時変化や変視量と光干渉断層計所見との関連を前向きに調べた報告はなかった。そこでこれらを明らかにするために前向き研究を行った。

方法:術前にMチャートで変視が検出された網膜上膜に対して硝子体手術を施行した49例49眼を対象とした。硝子体手術前および術後1、3、6、9、12カ月後の視力、変視量、光干渉断層計所見の経時変化とそれらの相関について検討した。

結果：水平変視量（横線の歪み度合い）および垂直変視量（縦線の歪み度合い）はともに術後1ヶ月で有意に改善した。水平変視量は術後12カ月まで改善傾向がみられたが、垂直変視量は術後6カ月で安定化した。術前視力、術前水平変視量、術前垂直変視量はそれぞれ術後12カ月の視力、水平変視量、垂直変視量と相関した。また、術後12カ月の視力は術後12カ月の水平変視量および垂直変視量と相関した。さらに術前垂直変視量は術後12カ月の視力と相関した。光干渉断層計所見と変視量の関連では術前および術後12カ月において水平変視量と中心窩網膜厚に相関がみられたが、垂直変視量と中心窩網膜厚には相関がみられなかった。

考按とまとめ：術前視力、術前水平変視量、術前垂直変視量はそれぞれ術後視力、術後水平変視量、術後垂直変視量の予後因子であった。したがって網膜上膜の治療に際しては視力低下や変視症が重症化する前に手術を行うことが望ましいと考えられた。また、垂直変視量が術後視力の予後因子である可能性も示された。術前、術後において水平変視量は中心窩網膜厚と相関したが、垂直変視量は相関しなかったことから、水平変視量が垂直変視量よりも網膜の形態変化を反映し易いと考えられた。